
縁切り坂

市川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縁切り坂

【Nコード】

N9412Z

【作者名】

市川

【あらすじ】

ところがひとたび夜になると、その一帯は突然息を吹き返したように、またたくまに灯りがはしり、どこからともなく人が流れ込み、眠っていた者は起き、一夜の饗宴を抱いて諸手を広げる火の鳥のごとく、絢爛な不夜城と化すのだった。呼吸のように繰り返されるその景色は、一種の幻想さえ私に起こさせた。

(本文より)

今ではもうその地名もなくなってしまっているだろうから、名前は伏せておくけれど、私が仕事の先輩に連れられて初めてその地を訪れた昭和七年の冒頭頃、北関東のある市に、ちよつとした色街の景色が盤を敷いていた。色街といってもそれほど大きな歓楽街というわけではなく、どちらかといえばやや田舎に引っ込んだような土地のことであつたから、昼間はいつそりと静まり返つてひとけもなく町全体がまるで廢墟のようだつた。読み捨てられた新聞などが惨めたらしく土壁などにはりついて、何日も野ざらしになっているような薄汚れた町だつたことを覚えている。

ところがひとたび夜になると、その一帯は突然息を吹き返したように、またたくまに灯りがはしり、どこからともなく人が流れ込み眠っていた者は起き、一夜の饗宴を抱いて諸手を広げる火の鳥のごとく、絢爛な不夜城と化すのだつた。呼吸のように繰り返されるその景色は、一種の幻想さえ私に起こさせた。

昼の姿と夜の姿があまり違つるので、私などはもともと見慣れぬ景色であるから大変驚き、先輩にさんざ初心だからかわれたものだつた。私は実際、あの頃もう三十を過ぎていたが、女と一ツ床に入つた経験すらない筋金入りの奥手であつた。細々と役所勤めをしなから、一人でどうにか生きていくというだけの寂しい男だつた。

私が女を苦手とするのには理由があつたが、私自身それを引け目に感じて人に話したからなかつたので、そんな私を可笑しんでか憐れんてか、黒野というその先輩はたびたび私をこつこつとした騒々しい

場所に連れてきた。彼はととのつた顔立ちの好男子で、派手好きなところがあり、歓楽街にも慣れていた。

その年の夏の終わり頃、彼は私をこの街のみすゞやという娼館に連れてきた。忘れもしない、ごく小さな建物であった。軒先にみすゞやと描いた洋燈を吊るし、それでぼんやりと客引きをしている、こぢんまりした店であった。

黒野はここに馴染みをつけている女がいたので、さっさとその娼妓を連れて上がっていった。桂子とかいう美しい女だった。私はと言うと、黒野がいなくなってしまうては身じろぎもできず、こつこつた場所の礼儀も常識も知らぬので、ただ縮こまっていた。するとこの主人らしい老婆が私の袖をひき、黒野さんの肝煎りなら遊んでいってもようございますよというので、私は益々困った。

だがここで買うにしろ買わぬにしろ、私は帰り道もおぼえていなかったし、それに少しばかり白状すれば黒野に連れられぬではこういった場所に来る度胸などなかったから、せつかくだという気にもなっていた。私は生まれ持ったとある引け目のために女を苦手にしてきたが、商売女ならばあからさまに私を嫌がったりもすまいという考えも少しあった。

とまれ繰り返しになるが、私は女など買おうと思つたことさえなかったなので、選び方も知らなかった。見かねた女主人が手を打ち合わせてひとりの娼妓を呼んだのは、それから五分も私が黙りこくつた後である。人気の妓ですよと、口元をゆがめて女は言った。

呼ばれて気だるそうに二階から降りてきたのは若く小柄な女だった。遠目にも濃い化粧をしていたが、どう見てもまだ十五や十六の若さだった。彼女はすたすた歩いてきて、私の目の前で止まり、舌つたらずな声で「いらっしやい」と言った。

名をふじ江といった。女主人は私の視線を受けて、取り繕うようにこの子は十八歳だと言つたが、実際私の見立ての方が正しかったに違いない。べつたり塗りつけた白粉にも染まりきれぬほど透明な

肌をして、あどけなく、躰つきなどまだどこか朴訥としてさえいた。小柄なために手の先まで袖に隠れ、それがまたより幼く見せている。異様に紅い唇だけが目を引いた。その唇が二度目に開いて「お客さん、こつち」と私をいざなった時、何か不思議な感じがした。

ふじ江に連れられて座敷に入ってから、私は居心地が悪かった。ふじ江は子供らしからぬ蓮つ葉な所作で灯りをつけ、この六畳ほどの狭い部屋の中を手早く支度すると、ほの明るくなった中に私を座らせた。部屋の中は蒸し暑かった。安っぽい柄の布団が真ん中に陣取っていた。少し乱れていたが、それは何となく気づいてはいけなようなことのような気がした。

それからふじ江は迷いもなく帯を解こうとした。私はあわててそれを押しとどめた。ふじ江は手を止め、まったく意外そうに、

「おじさん、初めて？」

と訊いた。そういう顔をするこの子は益々幼かった。

「うん うん、まあね」

ふじ江は微笑んだ。「私、初めての人は初めてよ。でも大丈夫」

そういつてまた着物を脱ごうとするので、私はまた慌てて止めた。今度はふじ江は少し怪訝そうな顔になっていた。

「しないの」

「うん」

どうして、とふじ江は言った。私は少し迷ってから、結局思ったまま、君はまだ子供だろうと口にした。ふじ江は目を丸くしたが、すぐに笑って「十八よ」と答えた。それはそうだ、絶対に本当の年齢を明かすなと教育されているのに違いなかった。

「そんならそういうことにしてもいい」

「変な人。じゃあ、どうするの。帰りたい？」

ふじ江は別に咎めているふうではなかった。どちらかといえばその声色がどこかほつとしているようにも聞こえたのは、私の気のせいではあるまい。いったいどういう事情で女郎に落ちたのかは知らないが、この幼い肢体をどれほどの男に差し出してきたのかと思う

と、何かやりきれない思いがした。唇の朱が哀しかった。

「しらふが嫌なら、呑んでもいいのよ」

あまり私が黙っているので、ふじ江は酒の支度をしようとした。私はそれも要らぬと言った。

「ふじ江ちゃん、それ本当の名前かい」

ふじ江はまた何を訊くのかという顔をして、「そうよ、ほんとうは別な字を書くのだけれど」といった。

「どうして？」

「いや何でもないんだ」

私は布団を避けて座り直した。ふじ江は困ったように手を止めていた。どうすればいいのかわからないというふうに見えた。それはそうだった。この娘はそれ以外に人を持って成すすべを知らないのだ。その目的以外に自分のもとを訪れる男を見たことがないのだ。

ここで私が帰ったなら、またすぐに別の男を座敷に招かねばならぬのだろう。

このとき、なぜそう思ったのか分からない。だがこれまでこの娘を抱いた男たちが、まさか年齢に気づかぬこともなかったろう。あの女主人とてそれを承知で抱かせているのだ。強いて言うならばそのことへの弱々しい憤りであったかもしれない。いや憤る資格などは私にはなかった。もちろん承知のうえだった。私はここではただの客で、それでなければ異邦人だ。その先には踏み込めぬ領域が確かにある。女郎をただ単純に哀れむことは、してはならぬことだ。

私はふじ江に今からなんでも好きなことをおやり、といった。ふじ江は今度の今度こそ意味がわからぬという顔をして私を見た。私は何もしないけどお金は払ってあげるから、おかみさんにもちゃんとして仕事をしたと言いなさい、いいねと言った。ふじ江はじつと黙っていた。

「なにか話をしようか。それとも眠りたいかい」

ふじ江は少し考えて、話をせがんだ。私はお世辞にも話上手な方

ではなかったが、これくらいの子が好きそうな話は何だろうと
考えながらいくつか不器用に話をした。つまらなかつたに違いない
が、ふじ江は面白がつて聞いてくれた。

はじめどこか世慣れたふうであつたのは、この娘なりに己を護る
手立てであつたのだと気が付いた。あの気だるい様は、いわば虚勢
であつたのだ。話すうちにふじ江は年相応の明るい娘に戻つて、楽
しそつによく笑つた。

時の経つのは早かつた。そろそろ行くと言つて私が腰を上げたと
き、私の背に外套を着せかけてくれながら、また来てくれる、とふ
じ江は言い出し損ねて俯いた。自分に会つのに金がかかることをこ
の娘は痛いほど知つていた。その様子がいじらしかつた。

私の方からまた来るよと言つたとき、ふじ江は嬉しそうな顔を
して、「じゃあ待つてる」と言つた。

それが最初の出会いだつた。

二

それから私はみすゞやの客となつた。二度目からは黒野に連れて
きてもらわずとも通うようになっていた。むしろ私は生来の小心の
ために、できるだけ人目をばかつて来るようにした。どうしたつ
て女郎宿に出入りしているところなどバツのいいものではなかつた
し、黒野に知られることも避けたかつた。なにしろ傍目には初心な
男が初めて通つた女郎によほど入れあげているようにしか見えな
かつたろう。だが私はもちろんふじ江に触れなかつた。座敷にはいり、
ただ一緒に過ごすだけだつた。ほんのひとときの自由をこの娘に買
い与えることで、私はなんとなくいい気もちになつていたことを否
定はできまい。

私に「買われて」いる間、ふじ江は好きなように過ごした。疲れ
ている時は眠ったり、本を読んだり、私とお喋りをしたりした。特
にふじ江は私と話をすることを楽しんでるようだった。お茶目な
性格で、どこにでもいる年頃の少女のようによくしゃべり、よく笑
った。ときに悪戯をすることさえあった。私も日頃女を苦手にして
いることを忘れるほど、ふじ江に対しては心安く話すことができる
のだった。私の引け目に行っていることを知ってもふじ江は私を厭わ
なかったし、私もふじ江を可愛く思う気持ちがないではなかったの
だ。

そうするうちにふじ江の身の上も少し分かってきた。案の定、ま
だ十六歳だということ。女郎になったのは、養い親のためだとい
うこと。物心もつかぬうちに親に捨てられ、道端で死にかかっている
ところを養い親に拾われて育ったのだという。

「おとうさんが病気になつてしまつて、おかあさんだけじゃどうに
もならないから」

ふじ江は目を伏せた。

「恩返しだと思つてるわ。実の子でもないのに、ここまで育てても
らつたんだもの」

その華奢な肩にのしかかっているものがふと見えた気がした。そ
れは重く恐ろしい化け物のような姿で、今にもふじ江の姿を呑み込
んでしまふそうに見えた。その化け物に喰われぬように必死に生き
ながら、この娘は自分を切り売りしているのだった。

「この人みんないい人よ。別に辛くないの」

ふじ江はいつもそう言った。だが、そう言わずにはいられないか
らそう言うのだと、まだ幼い目は隠しきれていなかった。

何度目の時であったか、ふじ江は私に縁切り坂の話をした。

「縁切り寺というのなら聞いたことがあるけれど」

するとふじ江は縁切り寺をこそ知らなかった。大まかに説明して
やると、さほど興味もなさそうに、ふうん、と言った。

「お寺のことじゃないわ。そういう坂があるのよ。この通りのひとつ後ろに、うんと古い神社があつて」

袖からわずかにのぞく指先で色とりどりのお手玉を弄びながら、ふじ江は歌うように言った。「その境内から長い坂道が伸びているの。それを縁切り坂って呼ぶの」

確かにこのみずゞやのある大通りの裏手にはうらぶれたような一角があつて、このけばけばしい夜の景色の中でもどこかひっそりとしていた。通り一本入ると急に静かになり、やけに神秘的な気分させられる。そういえばそこに赤い鳥居を見たことがあつたかもしれない。あれはやはり神社だったのか、と私は思い当たつた。

「好きな人と一緒に昇るとその人と結ばれるっていうわ。でも嫌な人といつしよに下ると縁が切れるんですって。姐さんたちが噂してるの。みんな、嫌いな男と一緒に、腕を組んで歩くのよ」

ふじ江の声はどこか遠かつた。うるんな瞳で転がるお手玉の色彩を追いながら、「信じる？」と私に尋ねた。

「さあ……」

娼妓たちが嫌な男と縁を切るために下る坂というのは、何かひどく生々しい感じがした。下る前に、下る後に、その男にまたその身を任せるのだから。

ふじ江の語り口調がどこか唄うようであつたためか、その光景がぼんやりと頭の中に浮かんだ気がした。きらびやかな着物を着た美しい妓が、横の男にしなだれかかり、傍目にはとてもむつまじく、境内の坂を下つて歩く。その表情は水のように静かである。だが女は声には出さず願っている。縁よ切れると必死に願う。男はそれに気づかない……

言い出されるべくして誰かが言い出した話だろうという気がしたが、ふじ江もそれを信じているらしいことは明らかだつた。

「結ばれることもあるのかい」

「そうみたい。でもみんなして縁切りに行くから、縁結び坂じゃなくて縁切り坂って呼ばれるようになったのよ。考えてみたらお

かきな話なのよ、好きな人と一緒に下つたら、その人と縁が切れてしまうのかしら」

だいいち昇つたら降りなくちゃならないのにね　と、ふじ江はくすりとした。

「好きな人がいるのかい」

ふじ江は寂しそうに笑った。「まさか。娼婦だもの、私」

酷いことを言わせてしまったと、私が少しばかり後悔して答えあげてくれているうちに、ふじ江は辛気臭くなつたのを嫌うように起き上がり、しりとりをやるうと言い出した。ふじ江はこれが強く、私は何度やっても勝てなかつた。ふつう客を勝たすもんじゃないのかいと言つてもみたが、ふじ江は容赦をしてくれない。頭の回転が速くいくらでも言葉を知っており、そうして私を負かすと飛び跳ねるようにして喜んだ。

それからひととき、私たちはキャアキャアとはしゃぎながら他愛もないしりとり遊びをやり、私は一寝して、茶をもう一服させてもらつて帰つた。

何度目かに気づいたことだが、私を見送るとき、ふじ江はそれまでの子供の顔から慣れた娼妓の顔に戻りかかつて、ふつと眼を虚ろに曇らせる。初めて会つた日のような気だるい感じを細い躰に纏わせる。それが彼女の戦闘準備であるらしかつた。それはいつ見ても見事で、かつ哀れだつた。

私と親しむほどに、私がない日を過ごすのが辛くなるのだとふじ江は言ったことがある。だがその後、でも平気よ、と独り言のように付け足して言ったのがいじらしかつた。

何もしてやれないのは初めから分かり切っていることだつた。私にできるのは短い休息を買い与えてやることのみだ。請け出してやることができるわけもなく、ふじ江の背負っている父親の薬代を肩代わりしてやることができるわけでもない。私はただの客で、それも女とこれまでまともに付き合つたこともないいいじけた男で、ふじ江と仲良くなつたのはただの行きずりだ。出来ることといえば聞か

ぬふりをするだけだった。

私はいつまでも異邦人だった。そう思うことで私は無理やり割り切っていたのかもしれない。だとしたら私は、ふじ江にとって誰よりも卑怯者であったのかもしれない。

ひとり夜道を歩きながら、縁切り坂とやらをいつそ父親と腕を組んで歩かせてやりたいなどと、浅ましいことをさえ考える始末だった。

ふじ江の父が死んだのは、私がいすゞやに通いはじめて三月も経った頃だった。

あるとき訪ねていくと、ふじ江は出てこなかった。具合でも悪くしたのかと尋ねると、女主人が構わないから上がうちまっしてくださいというので、部屋に直接訪ねていった。

襖を叩いても返事が無いので、「ふじ江ちゃん」と声をかけてみたがそれでも何も返ってこなかった。だが襖の向こうに人の戯り泣く気配がした。躊躇いながら引きあけると、ふじ江は灯りもつけない部屋の隅に伏せていた。何か白い紙を握り締めていた。

「どうした」

「死んだって」

涙にぬれた顔が振り向いた。化粧をしないふじ江の顔を私はこのとき初めて見た。素朴な顔だった。一度見てしまったらなおさらこの顔をどうして白粉で塗り隠せようかと思うほどの、きよらかな子供の顔だった。

私は部屋に駆け入ってふじ江に寄り添った。

「それ、お母さんからか。報せてよこしたのか」

ふじ江は首を振った。それからついにこらえかねたように顔をわっと伏して泣き、くしゃくしゃになった手紙を私に向かって突き出した。私はそれを受け取って呼んだ。カナ交じりの下手な文字を読み進めるうちに私は言葉を失った。

差出人はふじ江の縁者ではなく、隣人であるらしかった。ふじ江の母も父とともに死んだことが書かれてあった。いつそ父が死

ねばふじ江は楽になるのだろうか、と思つたことがあるだけに、この手紙は私にとつてもなかなか胸を刺すものだった。何かおそろしい感じさえした。

母親が何故どうやって死んだのかは書かれていなかった。だがおかあさんは随分疲れていました、という一文が何ごとかを物語つていた。夫の後追いをしたということなのか、それでなければ。どうであれふじ江には決して言うてはならぬことだった。養い親のために文字通り身を捧げてきたふじ江は、貰い子の孤独をこんな形で再び思い知つたのだ。

ふじ江は烈しくしゃくりあげていた。紅い唇で泣いた。

「ひとりぼっちよ。私、ひとりつきりになっちゃった」

「ふじ江ちゃん、そんなことはない。ここには力になってくれる人がいるだろう」

「そんなのいないわ。借金はまだ残っているし」

それを聞いて私は驚いた。父親の面倒がなくなれば、ふじ江はここから出られるのだろうかと漠然と思つていたので。

「うんと残ってるのか」

ふじ江は細かく頷いた。それから顔を覆っている痩せた手を、恥じるように、私から隠した。

それからしばらくふじ江を訪ねなかった。

仕事が忙しかつたためもあり、どことなく訪ねづらかつたためもあった。今頃どうしているだろうかと思ひながら、あの子に踏み込みすぎているのではないかという一つの制御のようなものが私を押しとどめていた。惚れてなどいるはずもなく、だがただ単に馴染んだだけというにはもはや関わり過ぎていた。そもそも私はふじ江に触れたことがないのだ。今となつてはそのことがかえつて残酷だったかもしれない。ただの客と娼婦の関係であつたなら、お互いにもう少し距離の測りようもあつたらうに。娼妓の涙など見るものではないことぐらい、私にだつてわかつていたのだ。

よつやくふじ江のところに行こうと思いつたのはひと月も過ぎた頃だった。私は黒野が帰りに町場で呑もうというのを断って、師走の風に首を竦めながら、ひとりのみすゞやを訪ねた。黒野はちよくちよくみすゞやに顔を出しているから、彼の来ない日を選んで行くのは変わらなかつた。私は黒野に何一つ想像されなかつたのだ。

ふじ江はまだわずかに鬨りを引き摺っていたが、それでもいくらかは明るさを取り戻し、私が訪ねて行ったことを喜んでくれた。志村さん、来てくれたの、という声には、どこかほっとしたような響きがあつた。それはもはや娼妓が客に言うおなじみの世辞というよりも、頼りにしている相手に久方ぶりに会えてうれしいというような、素直な声に聞こえた。男を惹くためだけの紅い唇には似つかわしくない無邪気さで、それは私に届いた。

この日はやはりふじ江の口数が少なかつたので、自然、私の話が主となつた。かといって私の来歴などつまらぬものである。型つてやれるほどの何の話を持っているわけではなかつたが、すいえばまだ話していなかつたと思ひ、私は妹の話をした。

私には生き別れた妹がいた。生まれたとき私はすでに十五か十六ほどになつていたので、随分歳の離れた兄妹ではあつたが、あいだに弟と妹が一人ずついたのでその当時は珍しいことではなかつたのだ。

私の生家は貧乏で、父も母も百姓だつた。朝から晩まで畑を耕している人たちだつた。狭い縁側に腰掛けて、もう味のしなくなつたスイカの皮をかじりながら、上下する鋤隙を見ていた子供の頃の記憶が今もある。

ひとつかふたつになつた頃、妹は突然いなくなつた。母の知り合の家に里子に出してやつたのだということだつた。子供が無いので前々から是非欲しいと言われていたのだという。妹の面倒はしぜん年長である私が見るのが決まりになつていたのである、ある日突然消えてしまつた妹のことを、私はしばし忘れられずにいた。私もその

頃少しは大人であつたから、もう戻つてこないと分かつた後は肩身
のつもりで女物の櫛に妹の名前を書き、なんとなく持ち歩くように
もなつた。私は妹を結構可愛がつていた。

母がどういつた気持ちだつたのかは今となつては知るすべもない
が、覚えているのは妹がいなくなつたその日、母が私たち兄妹に見
たこともないほど豪勢な夕飯を出してくれたことだつた。あれを妙
に覚えている。そしてその意味を私は未だに分からずにいる。日頃
どちらかといえば無口で厳しい人だつた母が、その夕餉の間だけ、
別人のようによく笑つた。

「妹さん、どこへもらわれていつたの」

「さあ分らない。母はちゃんとした話をしてくれなかつたから」
そう、とふじ江はそれだけ言つた。長火鉢にしなだれかかり、し
どけなく横座りをしたまま、目を窓の外に遣つていた。自分に重ね
ているのかもしれない。こんな話をすべきではなかつたと、
私は自分の迂闊を後悔した。他にどうでもいい話などいくらでもあ
つたらうに、ああ、これだから私は気が利かぬのだ。

ふじ江はしばらく黙つていた。それからようやく振り向いて、ひ
たと私の目を見つめたかと思うと、何か思いつめたような鋭い息を
一つ吐き、うす紫の着物の裾を鳴らして私の傍ににじり寄つた。そ
してぴつたり身を寄せた。

「ふじ江ちゃん」

ふじ江は私の躰でなく手にすがりついていた。左の手を 故あ
つて私があまり人目に触れさせたくない左の手を遠慮なしに暴き、
握りしめ、ほつそりした体に抱いた。

それは幼いふじ江の精一杯であつたのかもしれない。幾度となく
男に抱かれ、純潔などとうに喪つたはずのふじ江が私のような男の
手ひとつ触るのに何かしら決意をしなければならなかつたことに、
若い娘の途方もない純情を見た気がした。寸前に見たふじ江の瞳は
揺れていた。

このつまらぬ手を、ふじ江は長い袖に包まれた手で、まるで何か

尊いもののように熱く抱擁した。

私はふじ江が離す気になるまでじつと抱かれていた。二人黙つたまま、互いの呼吸の音を聞いていた。やがてふじ江は「ご免なさい」と言つて体を離した。

「志村さんの手、触つてみたかつたの」

はにかむように微笑んだ顔は薄明かりの中でほの白く、そのまま消えるのではないかと思わず私が腰を浮かしたほどに、儂く見えた。だがふじ江はちゃんとそこにいた。座つて、いきなり子供のような顔で大きく笑顔を作つた。十六歳というのは実に不可思議な年頃だと思つた。先ほどまで女だつたものが、今は子供になり、そしてまた私が帰れば女になる。確かなのはその透明感だけだつた。透き通るような魂の、最後の一滴まできらめくような、自在な透明感だけだつた。

私は自由になつた手を見下ろして、少しばかり照れ隠しに、こんな手でよけりやいくらでも触んなさい、と言つてやつた。ふじ江に手を見られるのは不快ではなかつたのだ。

それから私は疲れていたので横になり、ふじ江の楚々とした衣擦れの音を聞きながら、久しぶりに熟睡した。

四

それから何日かして、私はまたふじ江に会いに行つた。先日仕事で失敗をやり、そのやり場のない憂さをふじ江の顔を見て腫らしたかつたのだつた。

じつさい、安月給の私には、みすゞやに通い続けるのは決して楽なことではなかつた。もし給料が減らされるようなことになったらと思つと、潮時という言葉すら浮かんできたほどだ。ほかに遊興を

しないとはいえ、家賃や食費は毎月かかるものだし、苦しいときはわずかな蓄えを切り崩してしのぐこともあった。

ふじ江はいつも通りに部屋にいた。だがいつもなら喜んで迎えてくれるふじ江が、このときはいやによそよしかった。どうしたのかと尋ねても、別にとはぐらかされるばかりで、ぎこちないまま、話もさほどはずまなかった。前に来た時とは別人のようだった。

機嫌が悪いのか、それとも私に飽きたのか　そう考えてしまうのが私という男のさもしいところだった。私は女に好かれるたちはなかったし、黒野のように見た目がよいわけでもなく、本来こういった場所で遊ぶのに向いている男ではなかったからだ。

それでも一時間も居ただろうか。だんまりに堪えかねて、私は切り上げることにした。帰るよ、と声をかけると、ふじ江はのろのろと立ち上がった。「送るわ」という。

「いいよ、ふじ江ちゃん今日具合が悪いんだろう」

「志村さん、お願いがあるの」
ふじ江は私に背を向けたままだった。「一緒にあの坂下つてくれない」

「あの坂つて」
思い当たらないはずがなかった。

「縁切り坂か」

私はその名前を口に出すと、ふじ江はこくと頷いた。

私たちはみすゞやを出て黙ったまま連れ添った。半端に膨らんだ月がまだ夜の真ん中に引っかかって遊んでいた。呼気は白かった。夜風はその月が送ってくるように冴え冴えとしていた。二人して華やかな中心街に背を向けるように、路地に入り、ひとけも灯りもない通りを抜け、神社の境内を目指して黙々と歩いた。その間ふじ江はずっと俯いていた。

心変わりしたのなら、それは仕方のないことだった。私は黙って受け容れる気になっていた。この歳頃の女の子の気持ちなど私には

どうせ判らない。気紛れといえはそうであらうし、私に飽きたのなら飽きたのだらう。男女が未練がましく糸引き合つて別れるというのならまだしも、ふじ江はまだ子供で、幼いがゆえの気紛れはどうにもならないことであつた。あるいはふじ江の方こそ、行きずりの客に身の上にまで踏み込まれて迷惑に思つていたのかもしれない。そう思えばこれまでの自分の行動すべてがひとり相撲に思えてくるのも事実であつた。

やがて私たちは大きな鳥居をくぐつた。境内から、確かに長い坂道が伸びていた。月明かりに青白く浮かび上がっている。ひとけはない。いわくつきの道と思えばそれも見え、どこにでもある坂道といえはそれも見えた。

「降りようか」

するとふじ江は足を止め、私の手をまさぐつた。「手、つないでもいい」

「いいよ」

私は寂しさを感じながらも、反面奇妙に甘い気持ちでいた。囁くような会話が心地好かつた。どういふわけかはわからないが、今まさに別れてくれと言つているも同然のはずのふじ江の掠れた声には睦言にも似た媚びがあり、それがいやに男の心を刺激したのだつた。手を繋ぎたいというのなら好きにさせてやろうと思つた。どうせこれが最後なのだ。するとふじ江は私の左手を取り、強く握つた。素手だつた。いつも袖に隠れて見えなかつた手のひんやりした感触を初めて知つた。

長い坂道を下り終えるとふじ江は私の手を離し、「一人で帰つて」と呟いた。最後まで私の顔を見てくれないままだつた。ふじ江の小さい下駄が砂利を踏みにじつている音が、聞くに聞かれぬ声のようにも感じられた。

「それじゃあ」といって、私は別れた。

大通りに戻る手前で立ち止まり、一度振り返つてみたが、ふじ江はその場から動いていなかつた。手を、おそらく私と繋いでいた方

の手を、抱き締めるようにして俯いていた。夜の真ん中にぽつねんと一人取り残されて、その様子はあまりにも頼りなかった。走って戻って、嫌と言われてもあの子をみすゞやまで送ってやろうと思っただけだった。

思えばあの子はいつも私の手に触れたがった。ああも執拗にあの子が手に拘った理由を、私は後になって知る。

*

それから

半月も経った頃、私は職場の昼休みに、黒野の口から思いがけぬことを聞いた。

「そういえば、志村。君がみすゞやに通っていたとは知らなかった」
そう言つて黒野はライススレーの載った盆を私の隣の席に置いた。私は思わず箸を置いて黒野の顔をまじまじと見た。黒野は別段隠すことじゃないだろうというふうに、私の肩をたたいた。それから私の食べかけの蕎麦をちらと見下ろして、「またそんなものを喰っているから、君はいつまでも痩せているんだなあ」といった。私は返事もできなかつた。

黒野は私の横でカレーを喰い始めながら、
「なに、先日久しぶりに顔を出したら、桂子が泣き腫らしているんだ。気丈な女だから、何があつたのかと驚いて訊いたら、あそこの若い妓が死んだというじゃないか」

そこで彼はちらと声をひそめ、「ふじ江って妓だ。桂子は妹みたいに思つてたというんだが、何しろ自殺だから始末に追われて泣く暇もなかつたって、俺の顔を見てやつと泣けたなんて言うんだ。しかたがないから泣かせてやつたよ」

「い、いつ」

黒野は思い出すような顔つきになって、「もう半月も前だ。そう、それで、御贖戻だつた志村さんにもよろしくお伝えください」

って言うもんだから、俺は驚いたってわけさ」
自殺。

そのときどう返事をしたか、私は憶えていない。いまだにどうやっても思い出すことができない。その日の記憶は曖昧だ。ふじ江の死を知ったとき、私は確かに動転したのだろう。

ふじ江の遺品を整理する場に、私は同席することを許された。

遺品といってもふじ江は私物を殆どもっていなかった。着るものを除けば、あとは身の回りのこまごまとした品だった。この部屋の鴨居に腰紐を掛け、それで首を吊ったとのことで、発見したのは桂子だったそうである。もう死後の一切は住んで、ささやかな弔いもしてやたつとのことだった。見慣れたはずの六畳間は、ふじ江がないというだけで、恐ろしく素っ気ない、見知らぬ場所のようだった。あの娘、こないだふた親とも死んじまって、身寄りがなくなっちゃまってたんですよ　と、女主人は言った。

「生きてても辛っぱかりで、嫌になっちゃまったのかねえ……」
そうだろうかと思つた。最後に会つたふじ江の様子を思い出していた。確かに様子が変だった。だが私はあれ以上は踏み込めなかつたのだ。もう来ないと言われたら、黙つてそうしてやるほかに、私にはできることがなかつたのだ。

女主人はどうぞごゆっくり、と言つて下がつていった。

すると私に近寄つてきた人があつた。桂子だった。ふじ江よりもよほど年嵩で、美しく身繕ひしていたが、声は真摯な悼ましさにあふれていた。「可哀想な子です。そう思つてやってください」

「桂子さんは縁切り坂つてご存知ですか」

桂子は少し驚いた顔で、「ええ　」

私は最後に会つた日に、ふじ江に請われて縁切り坂を二人で下つた話をした。あれは嫌な男と縁が切れることを願つてするものだと聞きました。が正しいですか、と訊くと、桂子は哀しそうに「そうで

すよ」と言った。

桂子はこらえかねたように口元をきつく抑えた。そして次に彼女が言ったことに、私は驚いた。

「あの子、あなたのこと好きでした。うんと優しい人だって言っていました」

「それじゃあどうして……」

桂子は黙って首を振った。

私は、ふじ江の着物を手に取った。これは形見分けに桂子がもらうことになっていりしかなかった。うす紫に白い流し模様の入った、ふじ江には少し大人びた柄だった。いつだかふじ江が私に抱き着いてきた日に着ていたのによく似ているかもしれない。はつきり言っただけで似合っていないかった。全部そうだった。化粧も結い髪もあの子はあまり似合わなかった。

私はしばらくふじ江の遺品を手に取って眺めていた。櫛、手鏡、足袋、化粧道具……とりわけ化粧道具の使いこまれていることがまた哀憫をさそった。

行李の底に、おそらく普段使っている物とは違う、ずいぶん古い鏡があった。私はそれを取り出してみた。手のひらほどの丸型で、柄もついていないし、緑青が浮いてほとんど曇っている。それを裏返してみると、ふじえ、とかろうじて読める名前が書かれてあった。郷里から持ってきたものだろうか。

そこで私はふと 本当にふと、諒解したのだった。

ふじ江があも私の手に拘った訳を。私と縁を切りたがった訳を。それは突拍子もない考えであった。まさかと思うような解答だった。だがその突拍子もない考えを裏付けるようなことを、私はすぐに聞くこととなった。桂子は後ろで独り言のように、「好きになっちゃいけないとか何とか言っただけだから、私言っただけです、あんた娼婦なら男に惚れても辛いだけだよ……」

好きになっちゃいけない。

「桂子さん」

「はい」

「ふじ江、何か手に特徴を持っていましたか。たとえば……どれかの指が短いとか」

桂子は頷いた。むしろ何度もふじ江のもとに通い詰めていたはずの私が何故そんなことを知らぬのかという顔だった。私はやはりそうですか、と答えたきり何も言えなかった。

ふじ江は小柄のために着物が合わなかったのではない。考えてみれば仮にも一人前の娼妓であるふじ江が、何も丈の合わぬ着物を無理して着ていたはずがない。あれは、わざと手を隠していたのだ。私と同じ理由で。

切りたかったのは

男女の縁でない、兄妹の縁か。

それから先の話はすべて私の想像である。

だが桂子が言っていたことが本当なら、ふじ江が自分に思いを寄せていたことはもはや疑いようもなかった。ふじ江は私に惚れていたからこそ、二人で縁切り坂を下ってくれと請うたのだ。なぜか。ふじ江は、自分こそが私の生き別れの妹ではないかと思ったのだ。

何を馬鹿など、初めは私もこの考えを打ち消そうとした。だがあの狭い部屋が人生のすべてであったふじ江には、もともと理性などははたらかなかった。あの子はとてつもなく、本当に、文字通り幼かったのだ。それにふじ江は悪戯好きだった。時々やたらお茶目なことをして私をびつくりさせることがあった。もしかしたら私に女の影のあるなしを確かめたいというような、子供じみた嫉妬もあったかもしれない。私が寝ている間に、鞆の中を勝手に開けてのぞき見たことが一度もなかったとどうして言えよう。なかったかもしれないし、あつたかもしれない。それは今となっては確かめるすべがない。だがそうでなくて、ふじ江は何故死んだのだ。

私にもとより女の影などないことをふじ江はもちろん知っていただろう。それでも見たかったのかもしれない。あるいはないことを

確かめるために鞆を開けたかもしれない。繰り返しになるがあの子に一人前の理性などなかったのだから。だがそこでふじ江は予想だにしないものを見た。女などよりもっとひどいものを見た。

私の鞆の中には妹のための櫛が今も入っている。手放す時期を見失ったままだった。見ただけで古いと分かる櫛である。女々しい私は、妹の形見を肌身につけていることで、妹の安全を守っているような気になっていたのだった。それを未だに続けていた。馬鹿馬鹿しいとお思いかもしれないが、親だの兄だのというのはそういうくだらないことをする生き物である。そしてそれをこっそりと見たふじ江は、妹の名前　　そう、私の妹もまた藤枝といったのだ　　を知ったのだ。

この広い日本にふじえという名前の女がどれほどいるか、いくらふじ江とて想像できぬはずはなかったろう。だがあの子にはもう一つの確信があった。私の左手の薬指が遺伝病で短いことを、あの子は何度も見て知っていたのだから。私が人目を避けたがる理由子がこの手だった。そしてあの子の左手も同じ指もまた短かったことを、私は桂子から聞いた。生まれつきだったそうである。

それは幼いふじ江が何かしら確信するのに十分たりえなかったとどうして言えようか。あの子は一人ぼっちだった。二つの条件が目の前に揃い、もしや私と生き別れの兄妹かもしれないぬと思ったとき、そんなことがあるはずないだろうと否定してくれる誰かを持っていなかったのだ。ただただ自分の考えに溺れ、それを打ち消せぬままに孤独の螺旋のふちで思い詰めてしまったあの子が発作的に死を選んだとして、どれほどの不思議があるう。

あの夜ふじ江が私の手にすがりついてきた本当の理由は、この手を見たかったからではあるまいか。自分と同じ手を確かめたかったからではあるまいか。私は右手を差し出してあの子に自由を与え、左手で文字通り絶望を与えたのだ。そして同時に、ふじ江が縁切り坂で手をつなぎたがった理由を私はこのときによく知った。あれは、自分と同じこの手を隠してしまいたかったのだ。

私と一緒にあの坂道を下りながら、ふじ江は、縁よ切れる、他人であれと、一心にそう願っていた。縁切り坂にまつわる噂を、あの子は信じていなかったのだ。

私がふじ江の兄であったのかどうか、私は知らない。だがおそらくは違つたろう。ふじ江の死には意味がなかった。そのことが何より哀しいと思つた。

私はその後みすゞやに足を運ばなくなり、四十近くなつてからようやく遅い結婚をした。

縁切り坂は今もある。そのことだけは確かである。あの華々しい色街の景色は、戦争で跡形もなく崩壊してしまつたが、神社の界隈だけは奇跡のように残つたと聞いた。そこにかつて、幼い娼妓が切ない願いを懸けたことを、私だけがおぼえている。

私は今も一つの光景を見る。青白い月下に一組の男女が、あの坂道を下っている。男は冴えない風体で、安い外套にくるまつている。女は似合わぬ化粧をし、男の手にすがり、憂い顔で寄り添っている。女は必死に願っている。唇を震わせて怯えながら願っている。

男は何も気づかない。

そんな淡い夢である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9412z/>

縁切り坂

2011年12月29日14時48分発行